

令和3年10月5日発行(毎月5日1回発行)  
第61巻10月号(通巻747号)

# 風土



10

## 石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

### 眼を病むと書田蛙の氣狂ひ音

(句集『含羞』より昭和三十年作)  
この句には、「突然に左眼の視力が減じ、物の形さだかならず」の前書があります。この頃の桂郎師は、以前患った肺疾患が再発し、微熱が出て臥せていました。とうとう疾患は左眼にまで及んできたのです。文筆業で、「風土」の編集をおこなっていた桂郎師にとっては如何ともしがたい状態です。真昼の田の蛙の騒がしさは、桂郎師の心を憔悴させたに違いありません。

### 通ひ妻梅雨の下駄音紛れなし

(句集『含羞』より昭和三十年作)  
これも桂郎師が療養中の句です。家とは別に四畳ほどの小屋を書齋代わりに借りており、家族と離れて療養していたと、手塚美佐氏が『石川桂郎集』（俳人協会刊）で述べています。「下駄音」から家の近くであることがわかります。また「紛れなし」に、妻への感謝と愛しみが伝わってきます。

## 神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

### つくつくし土葬の子規に声とどく

(句集『氷輪』より平成十九年作)  
この頃の器師は病を経て高齢でもあったので、外出は控えていました。子規の墓前というより、法師蟬の声から、子規へ想いを馳せた句だと考えられます。子規の「ツクツクボウシツクツクボウシバカリナリ」の句を踏まえて、墓に眠る子規を目ざめさせていると詠んでいます。このように故人の魂と交感するのも、器師の「命ふたつ」の理念のなせる技です。「土葬の子規」がリアルです。

### 句碑一っ加へて山の粧へり

(句集『氷輪』より平成十九年作)  
この句には「京の日ノ谷山成就院に（いのちまた燃ゆるいろなり初明り）の句碑建つ」の前書があります。成就院の副住職の南奉栄連運さんは「風土」の同人です。栄連さんの長年の夢が適った句碑建立です。器師は日ノ谷山成就院への挨拶に、「燃ゆるいろ」を加えて山（寺院）の美しさを讃えたのです。この時には、今は亡き浜明史を初め、舞鶴や関西の「風土人」が集ったのを昨日のように思い出します。

おはぐる

南うみを

父の忌のおはぐる家に入りたがる  
片蔭に座す井の底に座す如く  
穴出でし蟬振り向くなふりむくな  
でで虫の殻透きとほるまで伸びて  
木隠れの瀧は白蛇となりにけり

随筆は龍太がよろし冷し瓜

師は

初風に下駄を鳴らせば器来る  
星飛んで足うらを砂の流れゆき  
敷藁にめり込んでゐる西瓜かな  
稲咲くと田を渡る風やはらかに  
ときをりはじゆくと聞こえてつくつくし  
葛あらし一気に山を駆けのぼる



# 竹間集

同人作品



青田の風

森高 武

忽然と漁船現れ海霧に消ゆ  
神祀る大岩の瘦せ土用波  
合歓の花弁財天は沼の前  
降るやうに雀の来る夏落葉  
鯉に撒くパンを欲しがる鳥の子  
炎天下翅曳く蟻を見続けぬ  
円墳の一基青田の風の中

さくらんぼ

土井ゆう子

蛭と会へぬ二タ年老いやすく  
校庭にしづけさ戻り合歓の花  
さくらんぼ鈴振るやうに洗ひけり  
十葉を咲くだけ咲かせ蔵の裏  
あの人のまだまだ見えてゐる日傘  
父と子の手こずつてゐる七夕竹  
水中花眠気を誘ふ午後の来て

草いきれ

池田 光子

蛭火のいつしか草の息となり  
灼くる地に鉄骨深く叩き込む  
念入りに洗ふ硯や器の忌  
眠るたび知恵つく赤子かたつむり  
扇風機大日如来へ首を振り  
犬小屋の陰に犬ある日の盛  
草いきれ兄の背中を追ひきれず

晩 夏

落合 絹代

水族館の海月此の世を賑はしむ  
閉館の延長晩夏の揭示板  
草引けば月のかげらの花茗荷  
修正液使ふ頻度や夜の秋  
しやくりあぐ灯心蜻蛉の翅つかひ  
明眸を隠しマスクとサングラス  
繰り返す流行ちまたのアップパ

星 涼し

豎山 道助

逡巡も不可思議も数星涼し  
レッシェン峠分けてチロルの岩清水  
メキシコ横断ヒッチハイクは絵日傘で  
ラスコリニコフ獄のスーパの蠅抓む  
鉄棒を蹴つて掴みし雲の峰  
操忌の銀座の地下の作り滝  
功なりてごきぶりを飼ふ学舎かな

つゆくさを

浜 福恵

夕立来や戸障子多き家に棲み  
誰とも逢はなかつた一日茄子を焼く  
糠漬コロナ編者自筆 三年のかをり芳し土用凧  
ふるさとが遠ざかりゆく草は穂に  
鳶が越ゆ水分峠秋の雲  
朝顔や吹かずにしまふ水鶏笛  
つゆくさを起し巡礼古道かな

サングラス

門伝 史会

下校児のこぶしの中の青蛙  
降り出して木の匂ひたつ蝸牛  
滴りの苔つたふとき輝やけり  
参道に拾ひし神の落し文  
三尺の影に身を寄す炎暑かな  
じやんけんで決めるお使ひ雲の峰  
とほき日の近づいて来るサングラス

心 太

鈴木 石花

浅漬の胡瓜小皿に朝の膳  
屋久島の石楠花庭に丈遅々と  
咲きそろふ日本石楠花のみの露地  
七年の地下出づ蟬の声高し  
戦争と平和に生きし心太  
ひとり居に最新型の扇風機  
籠り居の禍福無く開く缶ビール

夜の秋

山田 暢子

「生きてるよ」電話で答へ夜の秋  
神輿蔵閉ざされしまま暮れにけり  
盆近し夫来るからと美容院  
明日もまた予定なき日や土用入り  
颱風の気配木々たち騒ぎ出す  
夕顔に水やり明日のこと知らず  
十六夜やパソコン少し休まする

ほうたる

岩木 茂

ほうたるや鏡の中に登美子棲む  
峡谷をばさばさ揺らす実梅採り  
断層の亀裂より湧く蟬の声  
炎屋の触れて丸まる団子虫  
土用風転ころの敷木の先浸る  
菩提樹の葉陰涼しき桂郎碑  
器忌の明珍風鈴鳴りにけり

猛 暑

小林 輝子

蓬長く開拓地跡風のごゑ  
玉葛の這ひ上りたる空家かな  
じやがたらの花揺らし過ぐ霊柩車  
ゆき違ふ蚩夫がふり返る  
目測は三步なのに地を打つ西瓜割  
梅雨茸のひとかたまりに友の墓所  
死んでゐるやうに生きてる猛暑かな

帰 郷

田中佐知子

ふるさとに友あり桃の熟れてをり  
盛夏華南島の里一荷なる朝鮮朝顔実を結ぶ  
春林軒棘鋼なすダチュラの実  
鱈の開きの反身に焼けて大暑かな  
鱧ちりや海の向かうに淡路の灯  
京なれや湯引きの鮭の花のごと  
短夜の箱に仕舞ひし智恵子抄

黄色のリボン

中村 洋子

一礼し仰ぐ千年杉涼し  
シヤモニーより消印はがき雲の峰  
目印は黄色のリボン砂日傘  
鳴き砂を鳴かせ真夏の浜走る  
水海月水まんぢゅうのやうに揺れ  
古墳より古墳の見ゆる雲の峰  
観世音見上ぐる人の目の涼し

青葉木菟

橋添やよひ

水無月の風に吹かるる石も吾も  
眉を足すのみの粧ひ半夏生  
米寿までのち得て髪洗ふなり  
故郷のあの子も米寿ソーダ水  
水遊ぶ象や背泳ぐめくおかし  
「無言館」京分館や薔薇の咲く  
学徒兵のははへの遺書や青葉木菟

蟬の殻

浅田 光代

緑蔭にかの監督の椅子ひとつ  
風紋は風が消しゆく月見草  
じやがいもを咲かせて長き友の留守  
ふるさとの清水に顔を突つこめり  
帰心まだありてのうぜん咲きのぼる  
幕間に募金のまはる花氷  
掃き寄せて髪一本と蟬の殻

# 山河集

同人作品



## 南うみを選

露天風呂より白南風の墳墓見ゆ  
今買ひし本を枕に昼寝かな  
八月や息進る若き遺書  
仏壇が隠るるほどの西瓜なり  
うつくしき宙を欠伸の花火かな

山田 健太

海の日や解散となる戦友会  
太陽系第三惑星青海月

岡本 尚子

鞍馬

サングラス仕舞ひ金剛床に佇つ  
窓下に集合の笛夏休み  
ラジオよりビーチボーイズ雲の峰  
蜘蛛の囀のティアラめきたる雨雫  
万緑に包囲されたる露天風呂

菅原 末野

## 風土独語／南 うみを



八月や息進る若き遺書

山田 健太

八月は原爆忌や終戦日、そしてお盆と死者の魂に満ち溢れている季節です。この「若き遺書」は、太平洋戦争時の学徒出陣の学生の遺書（手紙）と読んでも差し支えないでしょう。その遺書から学生の生きたる声（息遣い）が送るように聞こえてくるのです。戦争とは何かをつくづく考えさせられます。

薔薇の夜のワイングラスの脚長き

森田 節子

この句は「薔薇の夜」に「ワイングラス」を組み合わせて、世界を作り上げています。庭の薔薇に囲まれた館か、とりどりの薔薇が活けてあるルームか。いずれにせよ西洋映画のような華やかさと気品があります。「脚長き」がポイントです。

海の日や解散となる戦友会

岡本 尚子

「海の日」が制定されたのは昭和十六年です。それも明治天皇に起因します。「海の日」は太平洋戦争と深く結びついています。超高齢となった「戦友会」の解散は、一つの歴史が終わったことを知らせています。

羽衣の舞のやうなる海月かな

津川かほる

燕より高く身を置き観覧車  
夕厨味噌煮の鯖を筒切りに  
語り部として八月を修しけり

夏兆す竹林の奥秘密めき  
よべの雨含む胡瓜を挽ぎにけり  
足るを知る暮らしや旧きサングラス

大伊豆の岬に立ちて雲の峰  
鎌倉の谷戸の深きに落し文

枇杷の実やふんぞり返る種ばかり  
登山靴仲良く並べ足湯かな

御持たせの品は菊家の水羊羹  
ガスパチョの彩る中に胡瓜あり

万緑の水鏡なる御射鹿池

小山 寿子

この句は、海月が水中でゆったりと泳ぐ様子を、「羽衣の舞」に喩えました。この比喩は作者の美意識によるものです。ふと詩人の金子光晴の「海月」の詩を思いだし、その透明感に通ずるものを感じました。

語り部として八月を修しけり

菅原 末野

「八月」の季語から、この「語り部」は原爆か、空襲か、いずれにせよ太平洋戦争に関わる「語り部」です。戦争の悲惨さと死者の魂を鎮めるために、八月をひたすら語り続けたのです。

古木戸を屈んで来る祭獅子

小原 美子

この句は夏の祭を詠んだものです。「古木戸」から下町の路地の家か、農村部の古い家の木戸を想像します。そこを潜り「祭獅子」が現れました。無病息災の獅子囃みのためです。「祭獅子」の人物は家の主と知己なのでしょう。懐かしき景です。

足るを知る暮らしや旧きサングラス

赤石 梨花

「足るを知る」とは、現実を満ち足りたものと理解し、不満を持たぬことです。しかし現実はそのようではないので、この境地に辿り着くまでには時間がかかったでしょう。若き日のサングラスを手にして、来し方を振り返っています。

# 風土集



## 南うみを選

薔薇の夜のワイングラスの脚長し 川崎 森田 節子

七月の鮎のリゾット焦げ目あり  
朝穫りのしの字に育つ胡瓜かな  
ふるると子の匙逃げる梅ゼリー  
リユックよりアルミのコップ岩清水  
夏旺ん三越ライオンマスクして 川崎 津川かほる

樹樹覆ふお鷹の道の崖清水  
羽衣の舞のやうなる海月かな  
縁の色変へて双子のサンダラス

東京五輪

雪辱の汗や柔道金メダル  
空洞木の白き膚や晩夏光 舞鶴 小原芙美子  
串打ちの腸ごと齧る土用かな  
出るやいな蚯蚓草ごとはふるるる  
古木戸を屈んで来る祭獅子

河鹿笛椽の巨木の立つあたり  
水筒の大きく揺るる夏帽子 町田 松本 胡桃

桑の実や母のそばかす譲り受け  
俎に水かけまはし雲の峰  
冷奴爪を短く暮らしけり  
海老フライからりと揚がる梅雨晴間  
草の色モザイクめきし春田かな 宇治 古橋 寛人

締め込みの尻のきりりと荒神輿  
かつかつと馬蹄の響き賀茂祭  
ざわめきのあとのどよめき神輿来る  
冷やならば切子グラスで鉄線花  
梅雨籠佳きこと一つ届きけり 上尾 根岸 善行

長雨の上がりさうなる胡瓜揉  
梅雨明や雲へ心を解き放す  
山風もガレの器に冷し酒